



・「術後の会費足によせて」

皆様お変わりありませんか。日頃から名古屋徳洲会総合病院がお世話になりましてありがとうございます。私も毎日全国を飛び回り、皆様のお声を聞かせていただいております。今般、名古屋徳洲会総合病院の心臓血管外科部長の大橋医師が、初めてハート通信を発行いたしました。彼は三年前私が何度もスカウトしましたが、なかなか徳洲会へきれてくれませんでした。彼が海外での臨床経験を終えて帰国した後、やっと私の協力者になってくれました。彼の超一流の技術で、たくさんの患者様を助けて欲しかったのです。早いもので、名古屋へ行って約二年になりました。必ず患者様のためになる医師だと確信しております。最後にありますが、このハート通信が末永く続いて、患者様の心の支えになってくれる事が私の喜びです。どうか大橋部長と共に頑張ってください。 医療法人 徳洲会 理事長 徳田 虎雄

徳田理事長より話をいただき、心臓血管外科を開設させていただき二年になるうとしております。手術をさせていただいた患者様も二百人近くになりました。患者様のなかには心臓血管外科手術後という特殊な状態に対し一人で悩んでいる方もいらっしゃるかと思います。また、手術後も循環器病の知識を深めて健康を維持していただくことも必要かと考えました。以上の理由から会報を作っているような情報を提供する必要があると考え、心臓血管外科手術患者の会を発足させていただくことにしました。情報交換の場は、会報あるいは親睦会のみとさせていただきます。プライバシーは十分守らせていただきます。この会を通じて、多くの体験談を読ませていただきました。多くの患者様の励みにもなると思いますが、それ以上に我々スタッフの励みになるものと信じております。皆様のご意見を聞いて充実した会を作っていこうと思っております。よろしくお願いたします。

<プロフィール>

昭和三十五年 徳島県出身
昭和三十六年 大阪大学医学部卒業
昭和三十七年 大阪大学医学部第一外科
昭和三十八年 大阪府立病院外科
平成元年 国立循環器病センター 心臓血管外科
平成四年 大阪大学医学部第一外科
平成六年 アルフレッド病院心臓胸部外科（オーストラリア）
平成八年 亀田総合病院心臓血管外科
平成十年 現職心臓血管外科部長

大橋 壯樹

MEという職業をご存知ですか？知っている方は少ないと思いますが、又の名をメディカルエンジニアといい、当院では「ME」と呼ばれています。何をしているのかといいますと、病院内の医療機器・・・例えば人工呼吸器、人工透析装置等、生命を左右するような医療機器の操作やメンテナンスを行います。中でも皆さんに関係があるといえば、心臓の検査（心臓カテーテル検査）をする際の心電図・血圧などのモニタ管理、心臓の手術の時に、一度停止させた心臓の代わりを請け負う人工心肺装置の操作等を行っています。つまり、皆さんと会うのは手術中や検査中の時なので覚えてはいいとおもいます。（言うなれば妻方さんですね。）時々、医師より皆さんが元気で退院し、通院していることは耳にしていますが、私達が皆さんの元気な姿を見ることはなかなかありません。今回、この様な形で皆さんとコミュニケーションが図れるのは私達MEにとっても嬉しいことです。病院の中には医師、看護婦だけでなく色々な職種の方々がいてその中にMEという人達がいることを覚えて頂けたら幸いです。最後になりましたが、皆さんが病院に来院された時、もしMEという名札を見かけたら、この記事を思い出して下さい。 臨床工学技士主任 松村 貴裕



・「心筋梗塞」からの生還

私は、2ヶ月程前から息苦しさを時々感ずるようになり心配しておりました。だがそれ程の大事になるとは思っておりませんでした。しかし、日常歩き慣れている近くの公園の坂道を登るとき息苦しくなり、注意していましたが、そのような状況が続いていた十二月十日の朝、呼吸が困難になり、胸が苦しくなりました。その苦しさは、実に耐えがたいもので、慌てて救急車を手配、迅速に対応していただきました。私は日頃お世話になっている、名古屋徳洲会総合病院を指定し、直ちに搬送され、到着することが出来ました。

直ちに心電図を始め、必要な検査をしていただくことが出来ました。特に冠動脈検査の結果、心筋梗塞が疑われ、冠動脈の根本が九十パーセント詰まり、このままでは益々悪化する状態であり、危険な状況であるとの説明を受けました。検査中は不安な思いでいっぱいでしたが、時々検査の説明と共に励ましの言葉をかけて頂きましたので、安心して受けることが出来ました。苦痛もありませんでした。心筋梗塞で手術に頼る他は、救命の方法はないとのご説明を受けました。家族一同が別部屋で結果を察し、待機しており、特に家内と長男に対して詳細なご説明が、大橋先生からあり、十分理解することが出来たとのことです。私も八十才と高齢でもあり、果たして手術に耐えられるかという不安もあり、先生も十分考慮させた結果、家族の強い希望と、私の顔ももう一度元気になるという生きたいという強い執着から、手術を受ける事を決断し、お願い致しました。私はこの年になるまで、手術を受けた経験はなく、心臓という臓器の大手術に対する不安と恐怖心がありました。が、「病気を克服して、元気を取り戻したい。」その一身からその日のうちに緊急手術をして頂きました。

一度決断すれば、今までの不安と恐怖心はなくなり、多くの人に激励され、落ち着いた心で安心して手術室に入ることが出来ました。手術前の全身麻酔の時に、眠るに驚かないで下さいといわれましたが、その通り、まもなく非常に眠くなり、意識が全くなくなりました。全身麻酔も初めての体験でしたが、何事もなかったように、今でも思っております。手術は、六時から夜中の十二時まで心臓を停止させ、人工心肺装置を用いて冠動脈にバイパスをするという大手術だそうですが、受ける本人である私は、何の意識もなく、時間の感覚も、痛みも全くなくなり、覚えは何もありません。目が醒めた時は集中治療室のベットの上でした。あれから、どれだけの時間が経っているのかも分かりませんでした。私の名前が呼び声に気付き目を開けると、忘れを覗いている先生を始め、たくさんのお顔が目の前に入ってきました。意識もはっきりして、私の立場も理解できる様になりました。そこで初めて手術は順調に終わったことを告げられた私には、命が助かったという実感と、喜びが全身に湧いてきました。人生八十才初めて味わった喜びであり、何物にも代え難いもので生涯忘れる事は出来ないと思っております。家族とも話すことが出来て、一緒に安堵の音が流されました。これだけの高度な手術をして頂いた先生方や多くの方々への感謝の気持ちと共に、全く苦痛もなかった手術に対して、有り難さもわいてきました。決心した後は手術も怖いものではないと認識し、悟ることが出来たようです。

その時以来、あの締め付けるような苦しさもなくなり、自由に話が出来るようになりました。翌日には、人工呼吸器が外され、自分の力で呼吸するよう言われましたが、特に支障はありませんでした。四日後には点滴もなくなり、食欲も出て入院中は残さず全部食べておりました。その日から自力で動けるようになり、動くように心がけ、又そのように言われました。始めは恐る恐る、片手でベットにつきまわり起きあがっていました。翌日には自力で、何の抵抗もなく、起きあがりベットからおりられる様になりました。少し歩くことも出来、自信もついてきたようです。室内で伝い歩きから始めて、一週間後には、病室内を自由に歩けるまでに回復し、入院以来十七日目で退院することが出来ました。その間始めてのことでも分からないことや、不安もありましたが、先生も度々部屋まで来ていただき、種々御心配を頂き力強く安心することが出来ました。又、看護婦の皆様にも色々お世話になり、忘れの出来なない思い出です。ここまで回復して手術後の痛みも日がたつにつれ薄れていき、回復していくのが感じられますので、喜びも大きく、日増しに元気を取り戻すことが出来ました。

退院後は私の家の前が公園になっておりますが、十二月は寒い日があつた為、あまり外に出ておりませんので、不安はありました。しかし、三日位で自信がつき、坂道も苦もなく登り、数日で町中も自由に歩けるようになり、元の生活に戻り元気な日々を送っております。

現在では一日一万歩、約7kmを目標に歩いております。これで自信もつき、体調も良いように思われます。これは、私が十年未だ続けている、日課の一つですが、元に戻ることが出来て心筋梗塞から生還できた喜びを身をもって実感し、毎日を元気に送っております。未だに不安も持っておりますが、引き続き通院で診ていただいておりますので、安心して毎日を元気に送っております。近頃は更に自信もついてきましたので、夫婦合わせて百五十才という年齢で、小旅行も楽しんでます。前頁の写真は十月十二日、三谷温泉に行った時のものです。お陰様で健康を取り戻すことが出来たことを感謝して、毎日を送っております。

以上私の体験を思いつくまま記してみました。同じ悩みを持つ人に多少でもご参考になればと思っております。



・「急性解離性大動脈瘤手術をうけて」

仕事上の研修先の名古屋で命拾いをして、一年が過ぎました。早一年と感じる時もありますが、実のところまだ一年・・・という感じも強いのが事実です。良くも悪くも「大変な事を体験してしまった」「させていただいた」という感じがします。

元来、小柄ながら健康には過剰すぎる自信があり「風邪」をひいても土・日で治るもの・・・といった風でした。いつもしも、「今一番欲しいものは、寝る時間！」が口癖で過労は日常的でした。年に一度の健康診断も前日は少し早めに休むくらいで、軽い気持ちで受けていました。

ところが何と、仕事上の研修先で思いもしない大手術を受けざるを得ないことになったのです。しかも、日曜日の夕方過ぎ。(研修先が名古屋・春日井だったことで、そして更に大橋先生がおいでだったことで、今、私がこうしていただけるのです。) 驚いたのは家族です。数時間前に、新幹線に乗るための私を送り出したのですから。私自身は、こういう時(大パニック)は開き直りよりないと思うのです。痛みで横になることもできない状態だった時、この痛み・苦しみ・処置はこの先生のバトンタッチ。先生に渡したのだから、私は深呼吸でもしてリラックスしようと。自分でどうしようもない、あとは「まな板の上の鯉」の心境でお任せとお願いをするのみです。いきなり押しつけられる先生は大迷惑でしょうが、本当に申し訳ないと思います。この様に、私の大手術の体験が始まったのです。数ヶ月後にあった日本で初めての臓器移植の手術時間より、はるかに長い時間がかかったようです。

ICUでは、とんでもない患者だったようです。スタッフの方々には大変なご迷惑をおかけしました。一般病室に移ってからは、他の患者さんにご迷惑がかからない程度にマイペースで毎日を送りました。とにかく、手術はパーフェクト。ならば、「一日も早く家に帰りたい」その一念でした。

痛み・苦しみの時に先生にバトンタッチしたこの体を、早く家に帰れる状態にしなければ、先生から戻ってきたこの体を回復させるのはこの自分としました。食事でも頑張っていました。歩行練習もやりました。水分も一生懸命とりました。結構忙しい毎日でした。夜はしっかりと眠りました。それまでの睡眠願望を解消するかの様に。生意気にも、こう心に誓っていたのです。「私は病人ではなく、患者なのだ。手術で血管が取り替えられ、患部が新しい部品になったのだから。」と。「爆弾を抱えながら歩く」のか、「考えられない進歩の高度技術で身軽になって歩く」のか。選択肢は二つです。自分が信頼できる先生を見つけることができれば、納得して(安心につながります。)先生をお願いします。開き直りで、しかも他人事のような無責任な私は、おかげで早期退院・早期現役復帰となりました。術後の痛み等も先生がコントロールして下さったと思います。それ以後も、一度も苦痛を感じたことはありません。

以前の様な無茶はしません。毎月の診察と指示取りにお薬も服用しています。「一病息災」も感謝しています。元気な姿を見ていただくことが大橋先生をはじめスタッフの方々への感謝と考え半年に一度「名古屋徳洲会総合病院」へ検査の為にいきます。これも、新しい楽しみとなり名古屋行きスケジュールをウキウキして組んでいます。

徳洲会の年中無休・二十四時間体制で、先生はじめスタッフの方々は大変なご苦労と頭が下がります。しかし、私はこの「徳洲会の理念」のおかげで、今生きています。全国のすべての市に「徳洲会病院」が出来て、休日のハブニングも救ってもらえる、信頼と暖かな病院が増えていって欲しいと切望します。

「患者の会」誕生は、術後の患者同士の悩み・生き方や内輪話など一人でも多くの方々のお話も伺えたり、手術前の方に体験談などでお役に立つこともあるかと思えます。



・「主人の心臓血管外科手術」

光陰矢の如しか、私の頭の中には、去年の二月二十日の朝の出来事が、昨日の事のように鮮明に記憶があります。

何時もとかわりない出勤前の二人での朝食も済み、出掛ける用意の最中、主人の体の左胸・首筋・左肩半分を急激な痛みが襲いました。自宅にあるバファリンで痛みを止めようとしたのですが、益々痛みは激しく、顔から流れる汗、冬だというのに、背中からはかすかに湯気がたつく汗、苦しさに顔をゆがめる主人の姿に、素人の私はおろおろするばかりで、救急車を呼び、私は主人を取るものも取り敢えず徳洲会病院に連れていくことにしました。

病院に到着する約四十分の間、私は目をつぶったまま、口もきかず、返事もせず、もう生きた心地はしませんでした。到着後、診察して頂くことになりましたが、古高先生の説明を聞いているうちに、主人はICUの病室に移されました。後を追う様にICUにいった私は、意識もうろうとした主人を見て、一体何がどうなったのか、訳も分かりませんでした。その間主人は二回ほどもどしてしていました。「家族は部屋の外で待って下さい。」と看護婦さんに言われ、外に出て次に入室許可されて見たものは、器械の取り巻きの中のベットに、真っ背で生死の間をさまよう主人の寝姿があり、私は気も転倒せんばかりの驚きでした。「何がどうして、どうなったのか？もう元気になることはないのだろうか？」頭の中は真っ白、「でも死なないで！死んでは嫌、生きて生きて」「今までの元気で、優しい主人にかえって」と、狂おしい程の心の乱れ、悲しみ、何とも分からぬ、何も出来ぬ苛立ち。本当に気が狂いそうでした。目の前で色々処置等に動いていられる大橋先生が、どの様に有り難い存在で、大きく頼もしく見えたことか。全てを大橋先生にお任せして、「よろしくお願いします。」と、心の中で手を合わせるのでした。看護婦さん方の献身的な主人への手当も有り難く、天使のようにも見えました。昼間のみか夜中までも懸命に看病していただいている姿には、家族として只只感謝の気持ちです。私は、主人の意識が戻る五、六日間まで、食事も喉を通らぬ位でした。朝・夕病室を覗いて下さった大橋先生には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

体調が戻り三月二十七日には手術を行いました。一進一退の病状で、自分を見失う事もありました。手術後も多々そのようなことがあり、先生をはじめ、看護婦さんに本当に迷惑をかけました。色々な一駒一駒が走馬燈のように思い起こされ、申し訳なさに身の縮む思いです。看病する私も、その頃は気持ちが転倒して、失礼な言葉も吐いたり反省することばかりです。完全看護の病院なのに私の気持ちで、主人の側に付き添うことを許して下さいありがとうございます。私自身が主人の側で、口を動かせば水をふくみ、口の動き方や動作で痰を取って欲しいのか、体をさすって欲しいのかが良く分かるし、主人にとっても気楽に物事を頼める妻が近くにいることが気も安らいだと思えます。

突然の心筋梗塞・入院・手術とめまぐるしい病院の生活の中で、身内はもとより友人達の変わりない主人への励ましや、いたわりが主人にとって生きる喜び、元気になるうとする意欲の基になったのだと思います。今でも感謝の気持ちでいっぱいになります。妻にとっても、例えどの様な土壇場になったとしても本人の「生きる」「生きたい」という気持ちがあれば必ず生への道は開拓されると、思えるようになりました。皆で一丸となって病気と闘い抜いたればこそ、今日のささやかな健康の体になれたと信じてます。又、今静かな平穏な病後の養生に明け暮れる主人の穏やかな顔を見ることが、仕事で頑張る私にとっても大きな励みになっています。本当に「頑張らなくっちゃ」という気が湧いてきます。これから生きていく限りは、大橋先生や皆様のお世話にならなければ、主人の明日はないと思っています。病気の事に就いては本当に無知な私ですが、病院関係の皆様御指導を賜り、残りの余生を二人三脚で静かに送りたいと思っております。九死に一生を得た主人は、大橋先生のおかげで命を拾ったのです。「先生との出会いがもしなかったら・・・」と思うと恐ろしくなります。患者を夫に持ち、今まで想像もしなかった障害者手帳を持つ体になった主人ですが、私が健康でいる限りそっと側に寄り添い杖になり、温かくやさしく見守って行くつもりです。

山のあなたの空遠く 幸すむと人の云う
憶憶吾人と尋め行きて涙ひさしぐみかへり来ぬ
山のあなたのなほ遠く幸すむと人のいふ